

平成23年4月27日(水) 「第8回湿原再生小委員会」が開催されました。

開催概要

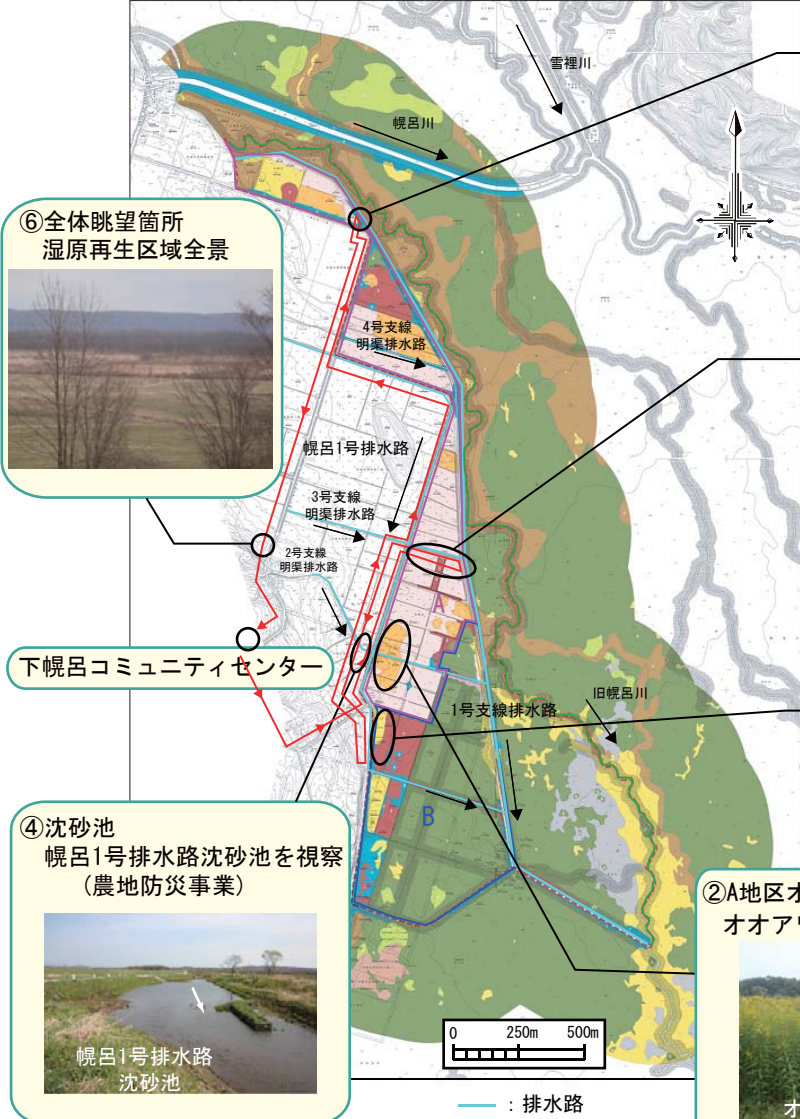
「第8回 湿原再生小委員会」が、平成23年4月27日(水)に幌呂地区湿原再生区域及び下幌呂コミュニティセンターで開催されました。小委員会には、41名（一般参加7名、湿原再生委員10名、関係行政機関21名、報道関係3名）が出席しました。

現地視察会では植生回復試験地や1号支線排水路、A区域のオオアワダチソウ群落、B区域のヨシ群落、幌呂1号排水路沈砂池、旧幌呂川の状況を視察した後、全体を眺望できる箇所から湿原再生区域全体を見渡しました。各視察地点では、委員長や事務局から説明があり、参加者からは多数の質問や意見、提案が出されました。

現地視察を終えた後、下幌呂コミュニティセンターで意見交換会が行われ、視察を受けての意見、提案や湿原再生の手法について協議されました。



視察行程



⑤旧幌呂川 1号支線排水路、旧幌呂川を視察



①植生回復試験地 植生回復試験地、1号支線排水路、3号支線明渠排水路を視察



③B地区ヨシ群落 ヨシ群落、ホザキシモツケ群落、ハンノキ群落 (A地区の目指す目標)



②A地区オオアワダチソウ群落 オオアワダチソウ群落を視察



⑥全体眺望箇所 湿原再生区域全景



④沈砂池 幌呂1号排水路沈砂池を視察 (農地防災事業)



凡例	
■ ハンノキヤチダモ群落	■ カラフトイソツツジ群落
■ ハンノキ高木群落	■ 水生植物群落
■ ハンノキ低木群落	■ オオアワダチソウ群落
■ ヤナギ群落	■ クサヨシ群落
■ ヨシ群落	■ 道路
■ スゲ群落	■ 開放水域
■ ホザキシモツケ群落	■ 湿原再生区域

1 幌呂地区湿原再生区域 現地視察会

各視察地点では、委員長や事務局から説明が行われた後、植生や再生手法等について議論が行われました。

このようなことが話し合われました。

●委員長 ●委員 ●事務局

● A区域

A区域では、植生回復試験地、3号支線明渠排水路、1号支線排水路、未利用排水路等を視察しました。

また、オオアワダチソウ群落（「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」の要注意外来生物）、道路側溝を視察しました。

■植生回復試験地

- 試験地のとなりにあるマウンドは試験地を掘った時の残土を置土したもので、ホザキシモツケの植栽試験を行っている。

■3号支線明渠排水路

- 3号支線明渠排水路は、現状で機能しているため、使われていない小規模な明渠排水路を埋めることを考えている。

■1号支線排水路

- 1号支線排水路は緩やかに南側へ流れている。
- 事業区域を湿原にしようとするれば、地下水位を上げるしかない。しかし、そうすると農地に影響があるから、それをどうするかという問題がある。
- そのあたりの調整が今後のトライアルになるだろう。



- 表土を剥ぐ、というのは問題のある地点だけ剥ぐということか。
- 全体を剥ぐという提案である。しかし、オオアワダチソウ群落のような場所では深く掘ることで地下水位を相対的に上げる。そうすればオオアワダチソウなどは生育できない。
- そこで必ず出てくる問題が、在来の希少植物の問題である。
- 表土を剥ぐときに、そこにある在来の希少植物をどうするかということは議論したい。
- 計画に穴が開かないように、その部分はケアをしていかなければならない。
- 植生図を書いて、ここは剥ぐ、ここは剥がないといった計画を練るべきである。
- 現存植生図を作る。そして、潜在自然植生図を作って比較すべきである。
- おそらく、一律に表土を剥ぐことはできないと思う。

■A区域オオアワダチソウ群落

- 置土はまんべんなく行ったようだが、その下の泥炭の質が微妙に違うらしく、時間が経つと地表面が不陸したり、植生も多様に変化してきている。
- オオアワダチソウ群落の排除は、地下水位を上げるだけでは上手くいかないだろう。
- 深く掘り下げ、冠水状態を長く保つことを考えている。
- 施肥、養分が気になる。窒素・リンのテストはやっているか。
- 剥いだ表土とその下の窒素・リンを測定して比較すれば良い。もし、表土にだけ窒素・リンが入っていれば、表土だけ剥いでしまえば除去できる。

■A区域の道路側溝

- 道路側溝を埋められないのか。
- 側溝は道路維持のためのものであるから、埋められない。
- 泥炭は軽いので、圧密のためには用いられないのではないのか。
- 泥炭をどれだけ積みめばどれだけ圧密が期待できるのか、トライアルすべきである。
- 泥炭は空気に触れると途端に収縮が始まるという特徴がある。
- 道路側溝の横は、剥いだ泥炭の置き場として考えて、圧密も期待しておく。

● B区域

B区域では、ヨシ群落、ホザキシモツケ群落等、A区域の目指す目標となる植生や、ハンノキ高木林を視察しました。

- ここに立つと「湿原の真ん中に居る」という感じを受ける。
- このように回復して欲しいと期待している。
- さらに奥へ行くと、ホザキシモツケが広がっている。
- A区域の表土を剥げば、B区域の様に植生は回復するのではないかと予想している。加えて、植生回復を早めるためには明渠を埋めるのがよいのではないのか、という提案がある。
- 裸地化したときに懸念されるのが、外来種の侵入である。
- 上にヨシの根を刻んだものを入れるとか、ホザキシモツケを植えるとかしなければならぬと思う。
- 外来種の侵入を防ぐには、地表面と地下水位の差がどれくらいあればよいのか。
- おそらく、地表面より-10~-20cm程度だと思う。
- 私の研究データでは、地表面より-5cmであれば確実に排除できる。
- 外来種を確実に排除するには地表面より平均で-5cm~-10cm、想定としては-10cm~-20cmくらいを期待できるようにしたい。



● 幌呂1号排水路沈砂池

幌呂1号排水路沈砂池では、国営総合農地防災事業「鶴居第2地区」の概要説明を受けました。

- 土砂の浚渫は地元住民が行っているのか。
- 地元をお願いすることになっている。
- 幌呂1号排水路は南側と北側、どちらに流れるように設計されているのか。
- 南側へ流れる設計になっている。
- 土砂の除去率はどのくらいか。
- 75%程度である。
- それでは、結構頻繁に浚渫を行うのか。
- 沈砂池の規模から、1年に1回程度である。

● 旧幌呂川・全体眺望箇所

②幌呂1号支線排水路を渡り、旧幌呂川を視察しました。また、全体眺望箇所では湿原再生区域全体を視察しました。

- 以前、議論した時に、幌呂川に流れている水を旧幌呂川に戻してはどうか、という意見があった。
- 将来的には戻してみてもよいと思う。



2 意見交換会

現地視察終了後、下幌呂コミュニティセンターにて、視察を受けての意見交換会が行われました。

このようなことが話し合われました。

● 委員長 ● 委員 ● 事務局

- 湿原再生区域全景を見渡した時にとても良い景観だと思った。この景観を皆さんの喜ぶ形にしたい。
- 今日の視察を通して状況がよくわかった。
- できること、できないことをもう一度整理して、できることから水位を上げる方法を、というのが現実的なやり方だと思う。
- 景観としては、まず湿原の縁にハンノキがあって、高茎湿性草原があって、低層湿原があるというような連続性を持たせることができると思う。
- もっと湿原が西側に寄るようにしたい。
- 植物の専門家は、どの植物がどのくらいあるということで、その場所の状況がわかるが、現況の植生をタイプ分けして地図化する、リファレンスサイトとの近さを数値化するなど、もっと分かりやすくすることが必要である。
- 現在の植生で水位を上げたらどうなるか、というようなことも含めて、もっと精密なデータが欲しい。
- 現在は、水位をコントロールするという考え方ではなく、地表面をコントロールして地下水位と近づけるという考え方でやっている。
- 表土を剥いても、根茎は残ると思う。
- 今まででは全体的に掘り下げることで地下水位に近づけるという考え方であったが、視察してみて、そんなに掘らなくてもA区域の相対的な地下水位を上げつつ、農地の地下水位は上げないという方法を考えられると思った。
- 栄養分の問題ももちろんあると思うが、結局は地表面の高さと地下水位のバランスである。
- そんなに掘り下げなくても希望の地下水位が得られる場所もあるかもしれない。植生の問題もある。
- 裸地化したときに問題となるのは、例えば外来種が繁茂してしまうとか、在来種を取り去ってしまうとか、そこが問題なのではないか。
- 取り扱いに注意が必要な希少植物が生えている箇所については、掘り下げるよりも水位をコントロールするという方が望ましいと思う。
- 排水路を堰上げて水位を上げるということ、表土除去を行うということは、有効な方法の一つだと思う。可能な方法は色々使ってみると良いと思う。
- A区域は、低層湿原を目指すのではなく、もう少し乾燥した二次草原を作ればよいと思う。
- それが自然の遷移の中でハンノキ林に変わっていくようであれば、コントロールをして、適正な景観をつくっていければよいのではないかと思う。



2 意見交換会 (つづき)

このようなことが話し合われました。

●委員長 ●委員 ●事務局

- 例えば、植生図を作って、オオアワダチソウの生えている地域は地表を剥いで、在来種が多い場所は避けるなどしてはどうか。全面的に裸地化するのは問題があると思う。
- 複数の方法を組み合わせてやったらよいと思う。
- 地表面を剥ぐにしても根拠が必要だと思う。
- 排水路を埋めるというのは、対象区域周辺の農地に影響を与えないで、使われていない排水路を埋めるということでしょうか。
- 農地に影響があるといけない。
- 1号支線排水路も含めた、排水路の堰上げということである。
- 1号支線排水路は大きめの排水路だが、それもコントロールすることか。
- それを行わないと、低層湿原から高茎湿性草原へ遷移していくといったような連続性を作れない。
- 埋めるということではなく、水位のコントロールを考えたほうがよいということか。
- その通りである。1号支線排水路は今後、重要な要素になると思われる。1号支線排水路のある区間だけを堰上げするとか、色々な方法を検討していただきたい。
- 前提条件として、周辺の農地に影響を与えない中でという考えでよいのか。
- その通りである。だから、幌呂1号排水路の方は水位を上げてはいけない。
- 大雨が降ったときにどうするか、ということも検討していただきたい。

- 東側の植生を西側に移行させたい。そして湿原再生区域を含めて連続性を持たせたい。
- ここは表土を剥ぐ、ここは堰上げするなど、再生の手法として複数の方法を組み合わせて行う。
- 技術的な問題として、農地に影響を与えないで、明渠などの水位をコントロールする方法を検討する。



3 その他

事務局より、今後の予定について説明が行われました。

このようなことが話し合われました。

●委員長 ●委員 ●事務局

- 「できること、できないことを整理する」、「複数の方法を組み合わせる」などの意見を受けましたので、事務局としてはこれらを整理して、議論のたたき台となるような実施計画を示したいと考えている。

- 委員それぞれが、意見をA4用紙1枚程度にまとめて提出してはどうか。
- アンケートを行い、委員の意見をまとめることとします。

第8回 湿原再生小委員会 [出席者名簿 (敬称略、五十音順)]

個人[6名]

植村 滋 北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター
清水 信彦
新庄 興
新庄 久志 釧路国際ウェットランドセンター 主任技術委員 (環境ファシリテーター)
矢部 和夫 札幌市立大学 教授
山田 浩之 北海道大学大学院 農学研究院 准教授

団体[3団体]

特定非営利活動法人 タンチョウ保護研究グループ [井上 雅子]
特定非営利活動法人 EnVision環境保全事務所 [渡会 敏明]
特定非営利活動法人 トラストサルン釧路 [氏原 英生]

オブザーバー[1団体]

釧路丹頂農業協同組合 [梶原 英光]

関係行政機関[4機関]

国土交通省環境省 北海道開発局 釧路開発建設部 [次長 遠藤 友志郎]
環境省 釧路自然環境事務所 [所長 野口 明史]
釧路市 [釧路国際ウェットランドセンター 研究員 斉藤さゆり]
鶴居村 [産業課商工観光係長 佐藤 大輔]

資料の公開方法

委員会で使用した資料および議事要旨は、釧路湿原自然再生協議会ホームページにて公開しています。

http://www.ks.hkd.mlit.go.jp/kasen/kushiro_wetland/index.html

ご意見募集

釧路湿原自然再生協議会運営事務局では皆様のご意見を募集しています。電話・FAXにて事務局まで御連絡下さい。

釧路湿原自然再生協議会 運営事務局

TEL (0154) 23-1353

FAX (0154) 24-6839